

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の3年度目)

1. 研究課題

(和文) 第一次世界大戦の総合的研究

(英文) A Trans-disciplinary Study of the First World War

2. 研究代表者

(氏名) 山室信一・岡田暁生

3. 研究期間

平成 22年 4月 から 平成 25年 3月 まで

4. 研究目的 (400字程度)

本研究は「世界性」および「現代性」を切り口として、第一次世界大戦とそれが与えた二〇世紀社会へのインパクトを明らかにしようとするものである。「世界性」とは、ヨーロッパの戦争にアフリカやアジア（オーストラリア・ニュージーランドを含む）の人々が大量に動員されたとか、戦線がアフリカやトルコにまで広がっていたといったことだけではない。第一次大戦を視察した日本の軍人が「総力戦／持続戦（永久戦）」というビジョンを膨らませていき、それがやがて15年戦争に至るとか、あるいはこの「永久戦争」のビジョンとは逆に「恒久平和」が模索されるようになって、第一次大戦後の国際連盟の成立になるとか、第一次大戦における「ヨーロッパ文化の没落」が非ヨーロッパ地域の人々にとってある種の解放感を与えることになるといった、現代にまで至る「事後的」で「グローバルな」インパクトを視野に入れない限り、ヨーロッパの国内戦争を超えた世界戦争としての第一次大戦の意味は見えてこない。この「現代性」および「世界性」という二つの切り口から第一次大戦を眺めることが、本計画の基本スタンスである。

5. 本年度の研究実施状況 (400字程度)

本年度は実質的な最終年度であり、今後の研究とりまとめへ向けて、16回の最終的な報告を積み重ねた。また既に6巻を出版している人文書院の第一次大戦シリーズは、本年度さらに1冊を刊行することが出来、また続く3冊も出版準備中である（来年度には刊行予定）。また2011年度より開始したベルリン自由大学によるInternational Encyclopedia of the First World War 1914-18プロジェクトとの研究提携は、本年度内に既に三項目の英語による原稿を提供した。これは従来の戦史中心／ヨーロッパ中心／ナショナル・ヒストリー中心的な第一次世界観を克服すべく、思想・芸術も射程に入れつつ、第一次世界大戦における「世界性」に焦点を当てた総合研究を目的としており、その成果はOxford Pressから出版の予定である。なお班長の山室信一は本プロジェクトにおける「東アジア」の項目のEditorial boardとなっている。

6. 研究成果の概要 (400字程度)

本年度の研究會に際しては、以下の四つのキーワードを研究成果のキーワードとして、特に重視した。第一のキーワードは「世界性」であり、第一次大戦をヨーロッパの内戦としてではな

く、あるいは個々の国のナショナルな戦争としてでもなく、グローバルな地殻変動を引き起こした戦争として、世界的連関の中でとらえる。第二のキーワードは「総体的性」である。政治経済はいうまでもなく、科学技術、マンパワー、文化芸術などすべての資源を動員する、二〇世紀的な国家システムの最初の実験場として、第一次大戦をとらえる。第三のキーワードは「連続性または継承性」である。つまり「第二次大戦へと続いていく戦争」として、戦間期との連続性の中に大戦を位置づける。第四のキーワードは「構想と遺産」であり、第一次世界大戦に至る一九世紀から始まる「近代の変容」とその「長い戦後」として二〇世紀（二一世紀）をとらえる。以上を通して、単なる過去の研究ではなく、第一次大戦の現在性を浮き上がらせることが出来たのが、本年の最大の成果である。

7. 共同研究会に関連した公表実績（出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など）
早瀬晋三『マンダラ国家から国民国家へ』（人文書院）／ホームページ公開

8. 本年度の共同利用・共同研究の参加状況

区 分	機関数	受入人数		延べ人数	
		外国人	大学院生	外国人	大学院生
学内（法人内）	3	5	1	17	15
国立大学	7	9		17	
公立大学	1	1	1	7	4
私立大学	12	12		31	
大学共同利用機関法人	0			0	
独立行政法人等公的研究機関	0			0	
民間機関	0			0	
外国機関	0			0	
その他	0			0	
計	23	27	2	72	19

研究参加者の所属機関数、参加人数、延べ人数を区分に応じて記入して下さい。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入して下さい。

※参加人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出して下さい。

（例）・1つの共同利用・共同研究課題で2人を共同研究員として3日間受け入れた（参加した場合）：参加人数2人、延べ人数6人

9. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数
（参加研究者がファーストオーサーであるものを対象）

論文数	16	
うち国際学術誌に掲載された論文数	(9)	(0)

※下段の（ ）内には、拠点外の研究者による成果（内数）を記載。

(注) 分野の特性を踏まえて、参加研究者がファーストオーサーである場合の他に、コレスポンディングオーサーである場合や指導した大学院生がファーストオーサーになっている場合など、論文における重要な役割を果たした実績を示す必要がある場合は、その役割を明示の上で論文数を記載。

役割		
論文数		
うち国際学術誌に掲載された論文数	()	()

※下段の () 内には、拠点外の研究者による成果 (内数) を記載。

※ 高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合、その雑誌名、掲載論文数、そのうち主なものを以下に記載。

※ 拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

掲載雑誌名	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名

(注) インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合は、以下に適切な指標とその理由を記載上で、掲載雑誌名等を記載。

拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

インパクトファクター以外の指標とその理由	人文科学分野においてはインパクトファクターそのものの定義が困難であるが、学会誌ないし商業誌として信頼性と多くの読者を持つことで高い評価を得ているものに限定した。		
掲載雑誌名	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名
『思想』	1	フランスにおける第一次世界大戦研究の現在－国民史の再考から植民地へ	<u>平野千果子</u>
『歴史群像・大日本帝国の興亡3』	1	複合戦争としての第一次世界大戦	山室信一
『政治的リーダーと文化』	1	パウル・ベッカーと音楽社会学の誕生	岡田暁生